

書 評

新宿区教育委員会編：新宿区地図集 A 4版 105
頁 昭和54年 新宿区教育委員会発行 定価 1,300
円

新宿区教育委員会編：地図で見る新宿区の移り変
わり—牛込編 A 4版 503頁 新宿区教育委員会
発行 定価4,600円

新宿区教育委員会編：地図で見る新宿区の移り変
わり—四谷編 A 4版 620頁 新宿区教育委員会
発行 定価5,700円

従前までの地方史・地方誌および郷土史・郷土誌類の多くは文献を基盤にした行政・社会経済史の変遷および人物誌を中心にした展開であったが、最近では絵図・古地図類を基調にして郷土の変遷を展望しようとしたものが現われてきた。絵図や古地図類は古文書のように多くを語らないように思えるが、熟視し熟思すると、その一葉の図幅にはその作成当時の景観が描写されており、また当時の空間認識や地理観が秘められている。さらに説明を加えるならば、絵図や古地図を現在の地図と比較すれば、勿論、測量や地図作図作成技術は稚拙であり、非科学的な面もある。しかし、それらを展望することによって、その測地や地図作図の発達過程を把握する端緒を見出しうるし、また一方、当時の時代・社会経済の様相を背景にして、土地利用や地域形成の考え方並びに地域に対する認識を考察することが可能になる。したがって、古絵図や古地図の方が現在の地図よりも形而上的な内容を潜在しており、また生活面の色彩が滲透している。そのためにこそ、今日では古絵図や古地図を中心にして郷土史（誌）の編纂が各地に盛んである。ここに掲げる新宿区の3冊の歴史地図集もその例外ではない。そのような各地の郷土誌編集のなかに、旭川のように地図による史的展望の際、過去の写真や現代の空中写真を添付しながら解説し、より地域的認識を深めようとした詳細な編集もある（金巻鎮雄編：旭川歴史探訪——地図と写真でみる——旭川文庫1 総北海発行 昭和57年3月）。

さて、新宿区教育委員会発行の3冊の歴史地図集を通覧すると、過去から現代に至るまでの郷土という身近な地域の風土的環境や景観を復原し、理解することによって地域社会の生活的変容を把握しようと努めている。このことは唯単に過去へ振り返るとい

うだけでなく、新しい地域的秩序を創造する糧となる。最近では故郷消失が拡大し、地域的不経済も増加して地域的秩序の崩壊も甚しい。故郷といえば、唯生れたところという意味ではなく、広く考えて自分の人格を形成してくれた地域空間であると考えたい。農村住民が農地の意義を理解しなければ、農地は壊滅するであろうし、都市住民が都会の地域的意義を考えないならば、都市は単なる喧騒の渦中に嵌り込むであろう。その意味で、住み良い快適で安全にして健康的な地域を建設するには、文学的にいえば故郷を取り戻さなければならない。つまり故郷を回復することである。これは単に故郷への郷愁ということではなく、そもそも土地とは何か、郷土としての風土、風土としての土地、人間の生活舞台としての土地の存在意義を改めて考え直すことである。その方法的手段として、住民の生活史という様相を背景にして郷土としての土地の変遷を追及し、現在に形成された地域の構造的意義と存在意義を把握することが重要であるとする。その意義を基盤にして、ここに新宿区では引続き歴史地図集が編集されたのであろうと思う。

まず、「新宿区地図集」についてみると、大きく3編（地図編・解説編・目録編）に分れる。地図編は4章よりなり、第1章では1860年以前、すなわち江戸時代の地図が7葉、第2章では1868年から1923年まで、すなわち明治初年から関東大震災までの地図が11枚、3章では1923年から1945年まで、いうまでもなく前章以降から太平洋戦争までの地図が6種、終章では戦後の地図が4図幅収録されている。それぞれの地図についての解説は解説編に詳論され、末尾に一括して当区立中央図書館郷土資料室所蔵の絵図・地図および地図帳のうち利用頻度の高いものを約300種リストアップされており、なお同室の分類番号が附記されているので研究者には極めて便利である。

この地図集は大東京という大都市地域の変貌の激しいなかで、特に都市的集積度の高い新宿という都会域の加速度的急変地域の変容を具体的に通覧しうることに大きな意義がある。就中、収録地図のうちで捲る頁の手を留めさせるのは第19図の「帝都大震災系統地図」である。これは隅田川下流一帯の右岸、

浅草から日本橋・銀座、左岸では本所から深川にかけての火元と飛火の経路、それに犠牲者数、当時の気象図などが掲示されており、震災の悲惨状況を図化している。その後、震災復興後の東京市全図を掲げているので、震災前後の比較が可能になる。また第25図では太平洋戦争による戦災焼失区域を図化し、戦後復興の新宿区全図をつぎに掲載している。震災や戦災による罹災状況や復興過程を追及しうる貴重な地図である。これらの地図類は文書では表現描写しえない災害という破壊の恐怖と悲惨を、復興という人間の生活力の偉大さを具象化してくれる。これらを理解することによって地域の愛着が生れる。飛躍するようであるが、地域愛がなくては人間愛も生れないのではなからうか。なお、地図目録には明治初期の地籍図類から、大正末～昭和初期の地籍図までの目録が掲げられ、東京という大都市の変貌の激しい地域を詳細に分析するのに役立つ。歴史地理研究者にとっては貴重な地図集である。

つぎに、「地図で見る新宿区の移り変わりー牛込編」についてみると、前書は新宿区を全域対象とした地図集であるが、これは新宿区内の牛込のみを対象として編集されたものであるから史料が部分的に詳細となり、それだけに大巻で豪華版である。各地図は前書と同様に、原図に近い色彩で収録されている。本書も冒頭にいう。東京という巨大都市の都市的変貌は超加速度的であるが、そのなかでも特に新宿区の変貌はより顕著でまさしく日変月遷(?)の状態である。このままでは町並の変化とともに新宿が江戸・東京に果たした役割や意義、あるいは新宿のよさやただずまいも忘れられ、ただ喧噪だけが特徴となって残ってしまう。それでは未来への地域形成、将来の都市建設のために現代人は無為に過したことになるので、その変貌の渦中において静かに正しくその変り行く様相を観察し、時代とともに歩んだ郷土新宿の足跡を未来への明るい街づくりに資するように、意義を見出そうとしたのが本書であろうと行間から窺われるのである。今回は牛込という新宿区内の一地区の変遷をより詳細に、しかも街角に至るまでその移り変わりをとらえ、機微に触れるように考えられている点に敬服する。各町や街区の時代毎の絵図を掲げ、「町とくらし」の状況を詳論していることに注意されたい。本書の意義が認められ、引続いて旧四谷区と内藤新宿を合わせ「四谷編」が上梓された。さらに淀橋・大久保編、戸塚・

落合編の編集も企画されているときく。それらの既刊の地図集を一瞥しただけでも大変な労力と時間を要したであろうと察しうる。収載の古絵図・古地図並びに史料は当館所蔵のものだけでなく、東京都公文書館や国立国会図書館などの諸史料を探訪している。

本書は大きく地図編と解説編に分れる。まず地図編では江戸絵図のなかから8葉を掲げ、続いて牛込町絵図の切絵図11図を掲載し、第3章では「御府内沿革図書」のうち「御府内往還其外沿革図 拾壹」と「御府内場末往還其外沿革図書 拾九元」・「同 拾九亨」・「同 拾九利」から48個所の絵図を集成している。そのいずれもが複製的に採色されており、しかも同個所街区の延宝・元禄・正徳・寛保・延享・宝暦・寛政・文政から天保当時までの3～4葉の町割景観図が並列して掲載され、加えて当時の絵図解説注釈が原典のまま復写掲載の編集である。これだけでも近世から近代への都市研究にとっては貴重な史料となるであろう。つぎの4章では東京大小区分絵(6葉)、第5章では東京実測図(4枚と図式表)、第6章に牛込全図(6枚)、第7章では明治から昭和初期にかけての牛込区の地形図(5図幅)を収め、8章では東京市土地宝典の牛込区の9地区が収載され、第9章には牛込区の町内図3枚、10章では最近章で現在の新宿区牛込地域の区内詳細図・史跡地図と住居表示新旧対照案内図など4枚が掲げられている。解説編では、本書に収載された各地図の詳細な説明と注釈があり、本書の面目を高めた。なおアンカーの役割として「牛込の町とくらし」と題し、牛込の郷土誌が手際よく整理され、近年の町並や町内の生活まで機微に触れるように詳らかに書き留められている。その精緻な究明に敬服する次第である。

さて、「四谷編」についてみる。前書と編集方針と構成は同じである。はじめに江戸大絵図7枚を掲げ、つぎに江戸切絵図8図葉、第3章では四谷町絵図4枚を収めている。第4章には「御府内沿革図書」の「御府内往還其外沿革図 十」・「同 十一」・「同 拾八元」・「同 拾八亨」・「同 拾八貞」・「同 拾九元」の絵図が35個所の街区にわたり収載されている。その編集内容は前書「牛込編」の場合と同様である。第5章には東京大小区分絵図、第6章に東京実測図の全国と測絵図譜を収め、実測図3枚を掲ぐ。7章には四谷区全図(8図)、8章の地形図収載では明治42年から昭和12年の修正測図ま

での地形図を5枚収め、第9の町内図の章では4種類を集めている。つぎに珍しいのは、第10章に東京市四谷区の地籍図を集成していることである。このように対象区全域の地籍図を収載するのは余り例のないことであり、研究者には極めて有意義で、本書の意義は大きい。同じく第11章には東京府豊多摩郡内藤新宿町の地籍図を載せている。最近の地図を集成した12章では5葉の街図を掲げており、住居表示新旧対照案内図や史跡地図などは一般に便利である。なお、つぎに解説編を設けて、本書掲載の各絵図や地図の説明と注釈を加え、さらに四谷地図の理解を深めるために「四谷の町とくらし」と銘を打って、徹地誌的に四谷の生活の移り変わりを展望している。

要するに上記3冊の地図集はいずれも東京という大都市地域の変貌を把握するには不可欠の地図史料集であり、また小中高校の教材資料の史料としてもその利用度は高い。(山田安彦)

京都大学文学部地理学教室編：地理の思想 地人書房、1983年、A5判、320頁

本書は、Ⅰ序論、Ⅱ地理思想の萌芽、Ⅲ中国の地理思想、Ⅳ日本の伝統的な地理思想、Ⅴヨーロッパの出会いという5つの章と巻末の東西地理学の交流を中心にまとめられた地理学年表からなり、全体で25の論文をその中に含んでいる。一篇の論文は、紙幅に制限され短いものであるが、しかしいずれもそれぞれの専門分野において長い研究業績をもつ執筆者が、欧米地理学史の文脈でとらえられてこなかった「地理の思想」の解明(Ⅰ～Ⅳ章)と非欧米社会である日本を事例とした欧米の近代地理学の受容について問題提起的にとりくんだものであり、多くの示唆に富んでいる。個々の論文にわたって詳しい書評を試みることは、もとより評者の力をはるかにこえている。ここでは、本書全体の意図するところに焦点をあてて、考えるところを若干まとめた。

「はしがき」に記されているように、本書の成立は——とくにⅠ～Ⅳ章までに関して——、1980年京都で開催された国際地理学会地理思想史部会における「地理的ラングージュ」のテーマに基づいた本書執筆者による報告に負うところが大きく、その延長線上にある。同部会に参加した京都大学文学部地理学教室の関係者によって、同教室の研究成果の一貫として刊行されたものである。この地理思想史部会のテーマの主旨である地理的ラングージュと地理と

の対応という観点から本書を考察することは、本書を理解するのに役だが、しかし、本書のめざすところは、単に、さまざまな「場所」あるいは「文化圏」においてこの対応を検討し、その多様な内容を明らかにするのにとどまるものではない。このような問題領域に対する関心は、すでに山野正彦「空間構造の人文主義的解説法」(人文地理31巻1号、1979年)、竹内啓一「主観の地理学からの逆照射」(一橋論叢、81巻6号、1979年)、千田稔監訳『地図のあなたに』(地人書房、1982年)において展開されているように、現象学的観点を地理学に適用した人間主義的 humanistic 地理学の業績によって大きな影響を受けてはいるが、本書は、人間主義的地理学の枠にとどまるのではなく、「世界観」、「文化圏」と「地理の思想」との対応を具体的に検証し、地理学説史の進展に貢献しようとするものである。本書の意義は、Ⅰ章序論の水津一朗「日本における地理の思想」において「現代地理学に必要な発想の転換をはかり、現代にふさわしい地理学の本質を確立するためには、ひとたび欧米地理学の羈絆をはなれて、わが国で培われた『地理の思想』をあらためて吟味する余地はないのであろうか」(pp. 4~5)という指摘に代表される。さまざまな「場」あるいは「文化圏」とは、アメリカ大陸やシベリアの未開民族、中国、日本であり、これらの地域における「地理の思想」の検討である。しかし、「地理」あるいは「地理の思想」といわれるものが何を意味するかは明確にされてはいない。「グローバルな『地理の文法』を準備するための方法論は、もちろんまだ手元にない」p. VIII)というように、むしろ「地理」、「地理の思想」という概念に対するはっきりとした共通の内容規定をこの段階でなすことをさげたとみるべきであろう。各々の論文で重複しているとはいえ、分析の対象としてとらえられている「地理」の内容は、空間認識、空間組織、自然とのかかわり、地誌といった地理学上のテーマにかかわり、空間の分割方位、中心、周辺、領域、場などの地理的空間を形成する基本的要素を通じて分析したものとみることができる。久武哲也「岩絵と砂絵の地図学」、小林致広「古代メソアメリカの絵地図」、斎藤辰二「原初的自然観と地理的認識の間」の論文は、空間に関する現実の情報を表現した水平的世界が、神話世界という垂直の世界に媒介されて認識されるのを地図という表現手段を通じて検討し、未開社会にお